

記録を書いてみよう

本講座では、入浴場面を例に取り、
「ケース記録」を実際を書いてみるワークを行います。

介護職員として担当する利用者(事例)を紹介します。
読んで、利用者像を描いてみよう。

【事例】

Mさん 女性 83歳 要介護3

アルツハイマー型認知症

介護職員が入浴を促すと、拒否することが多い。

また、ズボンを頭からかぶるなど、着替えや身だしなみなどに失行の症状が見られる。コミュニケーションにおいては、簡単な受け答えはできるが、こちらからの問いかけに、筋違いな答えが返ってくることもある。

Mさんの介護計画(入浴に関して)

入浴:本人に声かけの上、入浴の意向を伺います。
電子体温計で検温し、自動血圧計で血圧を測り、体調を確認します。

その後、入浴と、前後の着替え、整容などを促し、介助します。入浴後も体調を伺い、水分を勧めます。

ある日の入浴介助の場面

介護職員が本人に入浴を勧めると、
「いいわよ、あとで」「あなたが入りなさい」と本人は拒んだ。
介護職員は、「わかりました」と受け止め、
間をあけてから再度、「今日はお散歩して汗が出ましたね。
お風呂でもいかがですか」と声をかけると、
本人は「そうね」と言い、入浴してくれた。

入浴前の血圧は130/82mmHg、体温は36.4℃。
顔色は良好。

さあ、ケース記録を書いてみよう

ここまで挙げた情報で、ケース記録を書いてみよう。
細かな状況は、脚色して構いません。

次のことを意識してみましよう

- ・利用者や家族が目を通す前提で作成

書けましたか？

一緒に確認していきましょう。

ポイント①: 介護計画そのままになっていないか

介護計画に沿ってサービス提供を行うため、
確かに介護計画に似た形にはなります。

しかし介護計画そのままでは、「ケース記録」として
は不十分です。

悪い例

ご本人に声かけして入浴の意向を伺ったところ、一度は拒否したものの入浴するとのことでした。

電子体温計で検温し、自動血圧計で血圧を測り、体調を確認して入浴しました。

入浴後は整容を促し、再度体調を伺い、お茶を勧めました。

ポイント②: 今日ならではのできごとを入れる

今日(今回)のサービス提供によって生じたできごとは、その後二度と再現することはできません。

今日ならではのできごとを、記録に残しましょう。

(例)

「午後のお散歩で汗かいちゃったので、さっぱりしたいわ」とおっしゃいました。

ポイント③: 5W1Hを意識する

(例)

浴槽に浸かれた際に、職員がMさまに「湯加減はいかがですか」とお声掛けしたところ、「とっても気持ちいいわ」とおっしゃいました。

ポイント④：自立支援の視点で

(例) Mさまご自身で、両腕を洗われました。

ポイント⑤:利用者・家族に共感する姿勢

(悪い例)

入浴をすすめたところ、拒否されました。

利用者・家族が見る記録類には、利用者・家族を不快にするかもしれない

「否定的な言葉」を、可能なかぎり使わないようにします。

代わりに、下記のように本人の言葉をそのまま記録したり、肯定的な言葉

を使うように配慮しましょう。

(良い例)

入浴を勧めたところ、ご本人は「あとでいいわよ」
「あなたが入りなさい」と、気持ちが乗らない様子でした。

ポイント⑥: 対応ノウハウの積み上げ

この事例では一度は入浴に拒否が見られたものの、介護職員が再度声をかけたところ、本人はその気になり、入浴しました。

利用者がどのように反応したかを、記録に残し続けることで、「このタイミングであれば、本人はその気になって入浴する」「こういう言葉で促しても入浴しない」ということが見えてきます。

記録を通して、**利用者一人ひとりの「対応ノウハウ」**を積み上げていくことができます。

ポイント⑦: 専門用語・略語は使わない

バイタルを測り、BP130／82、KT36.4...

⇒これでは、利用者・家族はよく分かりません。

適切に伝わるよう、「血圧は130／82mmHg、体温36.4℃...」と書きましょう。

「尿(++)」「便・少量」などの「記号」や「量」についても、それがどのくらいを示しているのか、かかわる職員間で「物差し(基準)」を共有できれば賢明です。

ケース記録の記入例

入浴を勧めると、「いいわよ、あとで」とご本人。気持ちに乗らない様子でしたので、「わかりました」と受け止め、間をあけてから、「お散歩して汗が出ましたね。お風呂でもいかがですか」と再度声をかけました。Mさまは「そうね。午後のお散歩で汗かいちゃったので、さっぱりしたいわ」とおっしゃり、入浴して頂きました。入浴前の血圧は130/82mmHg、体温は、36.4℃。顔色も良好と見受けました。

記録は、これが正解、模範というものはありません。
介護職員一人ひとりが書いたその記録が、
利用者へのサービスの質を左右すると
自覚しておきたいものです。

お疲れさまでした。